平成１５年度　8020 公募研究報告書抄録

報告書名：高齢者における口腔乾燥症と歯の保持との関連に関する研究

研究者名：安細敏弘、吉田明弘、竹原直道
所　　属：九州歯科大学予防歯科学講座

【目的】

近年、口が乾く、ネバネバする、といった口腔の不快感を訴える高齢者が増加している。本研究の目的は、平成１５年度に福岡県で行った８５歳高齢者における調査を基に口腔乾燥症と口腔内状況、とくに歯の保持と口腔粘膜に対する影響について検討することである。

【研究方法】

対象者は、福岡県 9 市町村区（戸畑区、宗像市、行橋市、豊前市、苅田町、築城町、勝山町、豊津町、新吉富村）に在住する 85 歳者 207 名（男性 90 人、女性 117 名）であった。口腔内診査は、十分な照明のもと、現在歯数、歯冠部および歯根部の齲蝕罹患状況、舌粘膜と舌苔について行った。舌粘膜の診査は、舌の色、赤点の有無、裂紋の有無、舌乳頭の萎縮、舌面乾燥の有無、舌の運動機能評価および歯痕の有無について行った。舌苔の診査は、色、舌苔スコア、舌苔の厚みを評価した。口腔乾燥の自覚症状について調査するために、口腔乾燥に関するアンケート調査を行った。ドライマウス検査として、口腔水分計（商品名：モイスチャーチェッカー、ライフ社）を用いた口腔粘膜上皮内の水分量評価、唾液湿潤度検査紙（商品名：エルサリボ、ライオン歯科衛生研究所）を用いた口腔粘膜上の湿潤度評価および刺激時唾液流出量検査を行った。唾液は唾液収集用チューブ（商品名：サリベット、アシスト）を用いて採取した。統計解析には、口腔乾燥の有無と各因子との関連について、Mann-Whitney の U 検定を用いた。統計ソフトは SPSS 11.0J for Window（SPSS 社）を用い、有意水準は 5%とした。

【結果と考察】

本研究の対象となった８５歳高齢者のうち、エルサリボ（１０秒法）で口腔乾燥症と診断された者は、５６名（男；１１名、女；４５名）であった。口腔乾燥の自覚症状（口の中がかわく、カラカラすると回答した場合）を有する者は、８６名（男；３３名、女；５３名）であった。口腔乾燥の有無と現在歯数との関連を調べたところ、口腔乾燥を有する者では、現在歯数が有意に少なかった（$P<0.018$）。また、喪失歯数（M 歯数）との関連では、口腔乾燥を有する者では M 歯数が有意に多かった（$P<0.029$）。口腔乾燥と舌乳頭の萎縮との関連では、口腔乾燥を有する者では舌乳頭の萎縮が有意に多く認められた（$P<0.024$）。口腔乾燥と舌背部における口腔水分計の測定値との関連を調べたところ、口腔乾燥があると粘膜上皮内の水分量が有意に低下することがわかった（$P<0.000$）。これらの結果は、口腔乾燥が歯の保持に影響を及ぼすとともに口腔粘膜の変化を起こしやすいことを示唆している。

【まとめ】

高齢者を対象として口腔乾燥と口腔内状況との関連を調べたところ、口腔乾燥を有すると、喪失歯が多くなり、歯の保持に影響を及ぼすことが明らかとなった。また、口腔乾燥があると、粘膜上皮内の水分量が低下することから、舌乳頭の萎縮などの粘膜の変化を起こしやすいことが示唆された。